

山霞五月七日

千代こめてさらにかすみの色まされ今年手向もみつの山の端  
いなり山これもやはらぐひかりぞと春の霞をみつのかみがき

社頭祝同月十日

三笠山宮居はじめし年の名のかみのまもりは千代もかはらじ  
みかさ山下つ岩根に宮居してうごきなかれと世をまもるらし

草花盛同月二十四日

百草の花にくらべむいろもなし野もせに咲ける秋のさかりは  
咲きはててこのごろ庭を秋の野につくりなしたる百草のはな

山五月雨同月二十五日

をやむまもなほ嶺はれぬ五月山またあめもよの雲のぼるなり

見書増戀同

知るらめやなげのすさびの一筆も見ればえならぬ思そふとは

早春山六月四日

やはらぐるひかりに千代のはつ春を見せて色そふ松の尾の山  
峰の雪とけにし日より春の色のみどりにかすむまつのをの山

立春風同

春きぬと今日吹きかへて難波津に咲く花いそぐ風ののどけさ  
のどかなるこのあさ風に神のます杜のしたみち春も来ぬらむ

杜納涼同月二十五日

ゆふすすみ来ぬ秋かせもこの頃はやや袖なるる杜のしたか<sup>つ</sup>げ

樵路雨同

降り出づるゆふべの雨におふ柴の濡れてやおもきかへる山人

林蟬七月十一日

秋の色をまだきにいそぐ林かと木木にしぐるる蟬のもろごる  
鳴く蟬のこゑぞ涼しき夕づく日かげろふ程をまつのはやしに

星河秋興七月十一日

今もそのうき木にのらば天の河もみぢの橋のあきや見てまし  
かささぎのおのが契も待ちえてや今日はより羽の橋造るらむ

露底蟲 同月二十五日

うき秋のゆふべをわきて鳴く蟲はなにをおもひの露のした草

寄門戀 同

契りおくわが夕ぐれを門さしてこたへぬ人はとふかひもなし

夕木枯 八月十七日

さそはるる落葉ながらや入相のこゑ吹きまよふ峰のこがらし  
みねたかき梢にあまるこがらしや夕ゐる雲も吹きつくしけむ

寄傀儡戀 同

かがみ山むかへばうつる心もてひと夜ばかりと見る影ぞうき  
わするなよ結ぶこよひの草まくら明日は野上の里とほくとも

月前聞雁 同月二十五日

鳴きてくる折しもあれや隈もなき月によこたふ雁のひとつら

月旅宿友 同

みやこより慕ひきにける友ぞとや月は旅寐をなぐさめてとふ

山館竹 同月二十九日

谷の戸はへだつる岨のかたましにしげるもやがて窓のくれ竹  
葉分け吹くあらしを軒のひかりにて山窓くらくしげるくれ竹

嶺上曉雲 九月十一日

はれわたる高嶺は見えてしらむ夜になほ色ふかしのこる横雲  
明け行くををしむ名残はきぬぎぬの誰れをかためし嶺の横雲

燕 來 同

雁のゆく雲路はいはじつばくらめ汝もいくその空をきぬらむ  
住み捨てし去年の古巢の軒端をもあはれとひけるつばくらめ哉

葛 九月二十四日

心あれやわれとは染めぬ松が枝に秋を見せたる葛のもみぢ葉

思 同月二十五日

燃えてだに見せばや戀の山はその富士も淺間も同じおもひを

氷 室 十月六日

あとしある山の奥にも守りすてて氷室のみつき幾世絶えけむ  
六月の照る日のかげもよそにして氷室もるてふ谷の木ぶかさ

江紅葉 同

紅葉ばはまことの錦あらふ江に見るも千入のかげやまがはむ  
もみぢする麓の入江こぐふねもこころや染むる波のちしほに

残 菊 同月二十五日

枯れずなほのこれる花もむらさきの一本菊はにほひなくして

浦 舟 同

よそに見るみるめはあやな海士人の身をうら波にうかぶ釣舟

木のめもはるの同月二十九日

しもがれは見ざりし枝の淺みどり木の芽もはるの心をや知る  
それとなき緑ながらにうちけぶり木の芽も春の色ぞまがはぬ

初秋月 十一月二十四日

雲風はそのいろとなきゆふべより月のかつちの秋のはつかせ(イ)になりぬるはつ秋のそら  
このゆふべ雲間にほそき三日月もまづ秋しるくむかふ影かな

驛路雪 同

降るゆきに出でたつ今朝の驛路は心ものりて行くべくもなし  
さきだちて里までつづく跡もあれな驛路とほき雪のゆふべに

花洛雪 同月二十五日

おなじくばみちてをにほへ木木の雪さながら似たる花の都に

寄笛戀 同

等閑たがひに聞かばうからむ笛竹の夜ごとにきつつ吹きならずとも

桃 花十二月六日

もみちせぬ春のはやしに咲く花のくれなゐくくる桃のした道  
例たとひあれば咲く花の名のものとせを十づつみつの春にこそ見ぬ

松不改色同

ふかみどり平野の松はしもゆきの冬ごもりをも知らぬ色かな  
難波津のことばを千代のはじめにて平野の松の色ぞふりせぬ

杜神樂 同月十日

杜の蔭にうたへる聲もその駒のいさめるさまも見る心地して  
物の音も更にすめとや神のます杜のこがらし吹きあはすらむ

海邊見鶴 同月二十五日

和歌の浦にかくて千年も雪つもる冬をかさねよ鶴の毛ごろも  
波風もみなみの海へ冬わかでこゑさむからぬ和歌のうらづる

寶永三年

元日於柿本影前言志 據一本補

冬ながら立つ日はわかぬ春の色の年歸りてぞ四方にのどけき

同日於京極黃門影前言志 同

行く年をまもるてふよの明くるより心や春をむかへきぬらむ

鶯入新年語 正月十四日

うぐひすのさへづる聲もいくたびか人に答ふる春のことぶき  
聞く人にもろごころなる春告げてのどかにもあるか鶯のこゑ

早 春 同月十五日

雪消えてみどりにかへる松の尾の山もとき知る春のはつしほ  
冴えのこる嵐もあらしこのごろの春にかすめる松の尾のやま

初春霞 同

神がきのあたり霞めるのどけさや平野のまつの千代のはつ春  
みどりたつ平野の松も神がきに千代をこめてやかすむはつ春

梅花久芳 正月二十五日

よろづ代をここに匂へと千さと經てとほく北野の春の梅がかも  
よろづ代を花もしめ野の春風やかみのまにまににほふ梅が香

柳辨春同

いとはやも染むる色よりうちはへて世は春かせの青柳のかけ  
こと木にはまだ色わかぬ春をとく目に見せ初めてなびく青柳

山家水同

山すみはせきいれぬ谷の下水もかきねに近くおとしてや見る  
山みづの垣根ながるる音はしてこころすむらむ庵のしづけさ

餘花似春 二月十九日

春くれし日數を花のたどりてやおなじ色香に咲けるひともと

今さらも春見しままの色香にて花はやよひをのこす木のもと

厭 戀同

はてはただ誰れを思はぬ報ぞとあやしむまでに厭はれてうき  
おもほえぬ報もあれやうき物といとふは人のつらきながらに

隣家柳 同月二十五日

なかがきのそなたに立てる青柳も春をへだてぬ蔭おほふなり

聞名戀同

見し人のかたるばかりに年月をわすれぬ戀となれるあやしき

曉 鶏 三月十四日

夢ならぬあかつき闇のうつつをもおどろかしける鳥のはつ聲  
はるかにも聞く鳥の音を誰がやどの枕のみなるあかつきの空

秋田風 同

夕日さす山のふもと田かせ見えてなびく稻葉の雲ぞいろこき

早苗より待ちける賤も身にしめて稻葉のかせの秋や侘ぶらむ

遊 絲三月二十五日

晴るる日の軒端のどけき春風にみだれてつきぬ空のいとゆふ

橋 雨同

駒ならぬあおともたかくかち人のひぢがさ雨にいそぐ板ばし

夕 顔四月二十一日

たそがれの露の光も見る人はあらじかきねに咲けるゆふがほ

入日かげ名残のこらぬたそがれに垣根すすしく咲けるゆふ顔

寄菅戀同

浅羽野の浅はかならず忍ぶ名もたつみは小菅身はいかにせむ

かくこそと人にや今はいは小菅いはねばしげき下のみだれを

更衣惜春同月二十五日

惜しと見し昨日の春のなごりなほ今朝はとどめぬ衣がへして

寄山契戀同

名にしあふ妹背の山のうごきなきためしを人に契るゆくすゑ

春草短五月十一日

あさみどり枯生がしたにかつ見えてまだ妻ごもる野邊の若草

春としも見ぬ霜がれの野邊のいろを草のはつかにそむる下萌

五月雨同月二十五日

さみだれは緑したたる木がくれにありかも梅の見えて色づく

閑中燈同

ともし火も壁にそむけて眠のみもよほされぬる窓のしづけさ

寄枕雜同月二十七日

ぬるまこそ世をわすれけれ仙人のすみかにあそぶ枕ならでも

夢うつつわかすよ世をば忘れきて心やすむる小夜のまくらは

喚子鳥同

行くかたをたどる深山の喚子鳥道のしるべに鳴く音ともがな  
山びこはこたふる山のよぶこ鳥よべど聞かずと人やかこたむ

風告秋六月二十二日

このあさけ袖吹くかせの涼しさは聲なきものの秋を告げける  
時わかぬこすゑの風のこゑたてて松こそ秋をおどろかしけれ

湖上夏月同

ところがら渡りもすべく諏訪の海になつなき月の氷をぞしく  
をしと思ふみるめはからで志賀の蟹のつりする絲の短夜の月

避暑同月二十五日

南よりかをるを待つとあけわたすみすの下風あつさわすれて

馴戀同

恨あるなかをうき身のなれごろも馴れてもうときへだて心に

浅茅露七月二十五日

なべておく露よりけなる浅茅生は夜をへぬ程に色やかはらむ

海眺望同

雲もなき千里の沖のゆふなぎにそれかとまがふ海ごしのやま

湖千鳥同月二十九日

夜もすがら妻とふ志賀の濱千鳥みるめはなしと恨みてや鳴く  
志賀のうらや見おくる末のささ波に翼もまがひ行く千鳥かな

驚戀同月二十七日

むすび置きて忘れぬ露のかごとをやあはれと聞きし風の下萩  
忘るやと問ふ一言のよすがにも思ひいでつとせめて聞かばや

菊花薰枕八月二十三日

かをりきて飽かぬねざめの宿の菊はなも枕につみやいれまし  
ひと夜へておとろへもせじ秋かせの枕にふかき菊のかをりは

岸頭竹同

この河の底も千尋と見るかげや岸根にたかくなびくくれたけ  
影ひたす岸根の水もくれ竹のよよにかはらぬみどりをぞ見む

月前松風八月二十五日

何とまた心づくしの秋のこゑを木の間の月にまつかせの吹く

寄面影戀同

とどめおかぬ忘れがたみのあぢきなく心に残る人のおもかげ

被忘戀九月四日

くみそめし知らぬ昔のためしまで我がためつらき忘井のみづ  
名残なく忘れにけらし逢ひ見しもいはばいくその月日ならぬに

里擣衣同月二十五日

秋のかせ里をばわ<sup>と</sup>かぬ夜寒<sup>と</sup>にやをちこち人のころもうつこゑ

竹爲師同

我が友と見るかひあれやすくなるを心にならふ窓のくれたけ

春 音羽河同月二十九日

音羽川せきのこなたの春風やゆきげにまさるたきのみなかみ  
雪こほりせき入れてまさる音羽川けさ春風のこころをぞ見る

隔物語戀同

かたらふも言の葉のこる逢坂にへだつる關をまづやかこたむ  
わが思いひもつくさず逢ふ事はゆるさぬみすの内外へだてて

扇十月二十四日

こむ秋も棄てじないく夜袖なれて月をかくさぬ閨のあふぎは  
夕すすみならず扇のよすがにぞ來ぬ秋かせもそでに吹きける

岡 雪同

松はあれど誰れかはとはむ今朝の雪に道も續かぬ岡のへの里  
霜よりも寐てのあさけや寒からむ岡のやかたのうす雪のそら

池 氷同月二十五日



吹きと吹くあらしも今朝はあとぞなきさき波こほる庭の池水

戀 十月二十五日

我れを人秋よりのちの菊なれやうつるころの色を見すらむ

冬野霞十一月二十五日

袖の上にはらふもおなじ玉あられみだれてあかぬ野路の篠原

冬人事同

いとなみはあはれさむさもいとぬや炭賣る翁あじろもる袖

月前竹露同月三十日

葉をしげみおきある露にかげとめて月も夜ながき窓のくれ竹

かげやどす露や小枝にあまるらむ竹の葉づたひ月ぞこぼる

隣里鶏同

山もとの鳥が音近しこの里ははやしの木木のへだてばかりに

とほからぬ鳥の音いく夜なれぬらむ里つづきなる宿の寐覺に

寄鷹戀 十二月二十四日

はし鷹の野もりの鏡目には見て手にはとられぬ戀ぞあやなき  
わがなかはとかへる山の深くのみ忍ぶの鷹のよそに知らるな

泊擣衣同

波風のうきねの友や海士の子のさだめぬ宿にころもうつこゑ  
かちまくら寐られぬ夜の潮風になれぬる蚤もころもうつらし

寄手向神祇同月二十五日

この道を祈りきたの神がきの手向につもるまつのことの葉  
年月にいのる手向のことの葉をうけけるかみや道まもるらむ

寶永四年

元日於柿本影前言志補一本補

いつしかも花うぐひすと待つ人の心に今日のはるは來にけり

同日於京極黃門影前言志並一本精

のとけしな今朝よりはやく新玉の春になりぬる人のこころは

寄道祝世 正月十四日

わが國はもとたつみちも敷鳥のやまと言の葉よろづ代のはる  
すべらぎの代代のおきてにたがはぬや萬の道もすてぬこの時

霞知春 同月十八日

松の尾の山の霞のみどりよりまづ見る千代のはるのはつしほ  
神がきに千代をこめたる春ぞとはかすみも知るや松の尾の山

梅始開 同

なにはづにいま咲く梅の初花ものどかなる世の春やわくらむ  
心ありと見すや日影のさすかたをわきてまづ咲く梅の一えだ

松添榮色 同月二十五日

ことの葉のさかゆる春を神がきの松にも見せて色やそふらむ

雪の中に見しも千年のいろながら春にさかゆる松のひとしほ

隱在所戀 二月十三日

妻隠す名はわがためによそならでいづくと知らぬ矢野の神山  
尋ねてもとはむをいかにうき物と杉のしるしは教へざりけむ

崎 萩 同

誰が秋かみそめの崎の萩の上のこる言葉のつゆをかけけむ  
むかし誰がみそめの崎の秋をさへ今もしのべと萩や咲くらむ

鶯告春 同月二十三日

霜朝のさむさいとはぬうぐひすやおのが心のはる告げて鳴く  
まださむきあさけの窓の鶯はいづくのはるを告げて鳴くらむ

夕苗代 同

あさりして鳥だにかへる山かげにながき日ぐらしまつる苗代  
今日はみな種ひたすとやしめはふる夕やまかげの小田の苗代

梅移水 二月二十五日

咲く梅の木にした水や影うつる花にほひのふちをせくらむ

僅見戀同

かく迄の思は怪し見ずもあらず見もせぬ程のよそめばかりに

躑躅紅 三月十九日

暮れゆかば日かげにもつげ岩躑躅山したてらす花のくれなる

くれなるのこぞめの躑躅これもまた春の末摘花にやはあらぬ

苔爲石衣同

仙人のいつぬぎすてし苔ごろも世世の岩ほにかけて朽ちせぬ

動きなきいはほの苔や少女子がなづてふ袖をいまでも見すらむ

澤邊春駒 同月二十五日

あさりすと見ればかけりて春のこま澤邊の水に影もとどめす

窓前竹風同

くれ竹の小枝なびかす小夜かせにしげる末葉の窓をうつこゑ

路新樹 四月二十五日

あつき日にむかへばすすむ蔭ぞとやこの道のべにしげる柏木

寄雨戀同

笠やどり頼まば今日の雨もよに嬉しきものと見べきゆふべを

山 葵 同月二十六日

あふひ草いく世かけてか神わざにかざす卯月の松の尾のやま

今はまた賀茂のみあれをまつのをの山にまづとる葵ぐさかな

月生涯友同

この世にていかがうとまむ秋の月老となるをも忘れこし身に

雲の上の秋よりなれし袖とひて老いゆく身をも月はうとます

梨 花 五月二十一日

雨に見てえならぬ花のひとえだは誰が住む庵の軒のつまなし

誰が春か見し面影にいまもまた片枝はな咲くおふのうらなし

宴 遊五月二十一日

百敷の代代のあそびは數多あれど何かはしかむ三のむしろに  
さぞないかに心をやれる圓居して物の音あはす雲のうへびと

水 鷄 同月二十五日

夜もすがら叩くにあけぬ横の戸を誰れに託ちて水鷄鳴くらむ

旅行 行同

こころして野山の露もくたすなよ行くさき遠き旅のころもで

寄挿頭戀 六月二十七日

いつ迄かことなし草をわが中の名にしおひたる挿頭にはせむ  
逢ふといはばいかなる花をかざしてか憂き面影を人にかくさむ

杜時雨 同

この頃の木の葉はもろくさそはれて時雨を染むる神南備の森

霜がれのもりのしたぐさ時雨にもまた染めかへす秋の色かは

杜邊納涼 同月二十五日

神がきにつどへる袖のかへるさやすすむ北野の杜のしたかけ

返事増戀 同

書きざまもなさけおくれぬ一筆のいらへを見るにそふ思かな

秋 星 七月二十二日

ふけぬまに見えさす星のひかりよりはじめて長き秋の夜の空  
秋風のくもまの星は月ならぬひかりもことに見えてかがやく

雨中廬橋 同

忘れずばむかしをおきて忍べとやかをる雨夜の軒のたちばな  
うちしめる雨のゆふべや誰が袖のかをりも更に残るたちばな

雨中萩 同月二十五日

木のしたに咲けるもぬれて花の色にまされる宮城野の萩

聞村笛 七月二十五日

あげまきの住む山本も見えわかで笛の音遠く暮るる野邊かな

橋邊月 八月二十五日

かけ捨つる久米路の橋の絶間をも知らで夜わたる月やいく秋

寄蟲戀 同

思ふ人の臥す床ちかく鳴きよらばわが羨まむきりぎりすかな

槿 同月二十九日

いかに見む日かげ待つまのはかなさを露にあらそふ朝顔の花

手折りこし枝の朝顔日影をばよぎてもしばし見るほどぞなき

曉餘寒 同

冴えかへる鐘の響やはるきての霜夜をさらにおどろかすらむ

冴えかへる聲にはつぐる曉のかねては知らぬはるのしも夜を

柳辨春色 九月二十三日

立ちならぶこすゑも急げ青柳のいとく見する春のみどりをも  
木の芽はる春ともわかぬふゆがれの園生にはやく染むる青柳

寄簾戀 同

いかでかと思ひかけずば玉だれのみずやあるべき戀ふる透影

おほけなき身にもしめてや面影を忘れぬみすのまよひなるらむ

田家秋寒 同月二十五日

ふし侘ぶる秋の夜寒やいひかはす隣もちかき小田のいほりは

水草隔船 同

今ここによせぬる船も見えずなる河邊やたかくしげるみづ草

落葉風 十月二十五日

吹きつくす枝には絶えてにはもせの落葉にのこる木枯のこゑ

互疑戀 同

あちきなき心くらべか人もかく我れにたのまむ中のちぎりは

遠千鳥 十月二十日

この里のねざめにまがふ波ふけて河よりをちに千鳥鳴くこゑ  
こゑ冴えて川邊のつきに鳴く千鳥たれか都のねざめにも聞く

野 風 同月三十日

見し秋のいろなき草葉吹きしをる野分の風はこの野邊かな  
吹き結ぶしもにもかれぬ聲はして野中の松に冴ゆるあさかせ

雪埋松 十一月二十四日

下をれに見し一枝のみどりをもまた降りかくす雪のまつかけ  
色かへぬみどりともなし降り埋む雪よりのちの庭のまつが枝

寄 關 戀 同

うきはそのあづま路ならぬ通路に我れをなこそそのせきの關守  
へだておくこころを中の關路にて我が越えがたき逢坂のやま

網 代 同月二十五日

宇治川や波のよるのみなす業に暮るるひを待つ網代なるらむ

曉 鷄 同

そばだてし枕身にそへまたや寐むまだ夜は深き鳥の八こゑに

花染山 十二月三日

雲かすみひとつに匂ふ花のいろの山よりあまるみよし野の春  
雪消えし昨日の山のみどりをもまた咲きうづむ花ざかりかな

徑 董 同月十八日

踏みしだく道の芝生のつば董をしまで摘まむ咲きあへずとも  
行くと來と摘までは人も過ぎがての道さまたげを咲く董かな

雪中 殘 雁 同

雪に聞く今朝は身にしむ色かへてをりふしごとの初雁のこゑ  
かきくらし今朝降る雪を飛び分けて白妙ごろも雁のくるそら

社頭祝言 同月二十五日

かしこくも守るや松の言の葉の手向にそへていのるゆくすゑ  
動かじな世をたひらけくやすらけくまもる北野の神の宮居は

寶永五年

元日於柿本影前言志 第一本稿

天が下うるほふ春をまづ見せて今日降る雨や四方にのどけき

同日於京極黃門影前言志 同

こよろぎのいそぢこす波いつの間に數そふ春を數へ知るらむ

春竹契久 正月二十三日

春のいろの縁にあかて我が友と馴るるやいくよ千尋あるかけ  
我が友と馴れもてあそぶ吳竹の千代のみどりに飽かぬ春かせ

早春山 同月二十四日

千代よばふ聲もそひてや長閑なるはつはるかぜの松の尾の山

立ちそむる春のかすみの縁をやまづひとしほの松の尾のやま

初 春同

松杉のまだみどりなる雪ぎえに平野のもりやはるを見すらむ  
雪のこる平野の松や十かへりの花をも見する千代のはつはな

梅花盛久 同月二十五日

かみがきの春を色香に咲く梅は花のさかりものどかにぞ見る  
吹く風ものどかなる世のはるに見む北野の梅の花のときはは

海邊霞 同月二十八日

なみかせも昨日までこそあらしほの汐の八百路にたつ霞かな  
かぎりなきみるめにもあるか霞しく朝夕なぎの春のうみづら

遠嶺雪 同

雪なれやかさなる山のみねごしに見ぬいろ冴ゆる今朝の白雲  
めづらしと雪にぞむかふ雪ならぬ折は見わかぬ比良の高根も

相對如夢寐 正月二十八日

戀ごろもかへさで今宵夢は見つおもひ定めむうつともがな  
現ともわかぬ心のさかひには覺めぬゆめなる夜半のおもかげ

曉 鳴同

誰が秋のうきをかぞへし寐覺よりかく數ならし鳴のはねがき  
秋の思つきぬ寐覺のながき夜にひとりがため鳴のはねがき

夕 鶯聞正月二十五日

のどけさを飽かぬものとや夕日影のこる梢にうぐひすの鳴く

初 戀同

うき思つくばの山にいりそめてわくかたもなき道やまどはむ

鶴立洲 同月二十七日

鳴く聲をかはずの田鶴や下居るも見えぬ葦邊の友しらすらむ  
毛ごろもに立ちはかさねぬ河なみもおなじ白洲にまがふ白鶴

千 鳥 二月四日

行きかよふ河邊もわかぬ山もとの霧のまよひに千鳥鳴くらし  
河風の月をもここに見るばかりねざめの千鳥こゑぞ身にしむ

尋餘花 同月十八日

まれに咲くありかはそこと夏山の花に誘はむまぼろしもがな  
春よりもいまぞ分け見むほかの散る後こそ花はみ山がくれを

關路雨 同

不破の山あれし關屋はもる雨に笠やどりするかちびともなし  
鈴鹿山ふり出でぬべき雨もよに濡れぬさきとや急ぐたびびと

野若菜 同月二十五日

ここかしこ青むばかりと見し色のやがても野邊を染むる若草  
曉 鷄同

有明の月におどろく鳥が音やまだふかき夜のまくらとふらむ



夕 霜三月七日

かげよわき夕日がくれの浅茅生や暮れぬに結ぶ霜を見すらむ  
冬さむきほどもさぞなと夕こりの霜を軒端に見てぞおどろく

寄草馴戀同

ゆかりぞと手に摘みなれて紫に染めしや深きおもひなりけむ  
わが心つなぐ草葉にまかせきて身こそたなれの駒となりぬれ

雉思子同月二十五日

巢にこもる子を思ふとや狩人の入野のきぎす立ちさらで鳴く

旅行友同

出でこしは都のそこといひかはし知らぬに馴るる旅の道づれ

卯花似月四月二十五日

空に見ぬ卯の花月夜よもすがら影かたぶかすてらす木がくれ

寄郭公戀同

妻ごひに鳴くほととぎす我れながら世に忍音も人やとがめむ

原照射同月二十六日

真萩咲き鹿鳴く秋もとほからず宮城がはらにともしさをらむさすともしかな  
里とほみ牡鹿たたずむあたりとや麓のはらにともしきすらむ

澤 月同

いづくまで心もゆけと影ひろき澤邊のつきに田鶴も鳴くらむ  
月になる澤邊を見ればつゆまがふ水草きよきあきかせぞ吹く

松 風五月二十一日

千代のこゑはるかによばふ山風のこすゑもたかき松の尾の宮  
吹くも今をさまれる世のこゑにして風しづかなる松の尾の山

浦 鶴同

宮どころありし難波の浦づるや今かみがきの千代よばふらむ  
もろ袖に手向くる和歌の浦の浪千重もかさねよ鶴の毛ごろも

五月雨 五月二十五日

この程切はあまり日を経て幾日ともかぞへずよまぬ五月雨の空

山家木同

名も知らぬ木木も年ふる山住に馴れてしたしむ蔭となりぬる

早春鶯 六月七日

八雲たつ神のその世の長閑さものこすや初音はるのうぐひす  
花をいそぐ神のそのふの春にまづ百よろこびの鳥のはつごゑ

立春風 同月八日

今日しこそ春はきぶねのやまかせに玉ちる浪の音ものどけき  
長閑なる世のためしにや吹きぬらむ四方に春立つ今日の初風

納涼 同月二十五日

しばしとて休らふ松の下すすみ暮れゆくままに猶ぞ立ちうき

逢戀同

幾ゆふべ訪はでうかりし恨をも今宵のこさぬにひまくらして

忍戀 七月十四日

うき思身にあまるともかくてこそ忍びばつべき世をば忘るな  
色に出づる露をもよそに見とがめぬ軒のしのぶぞ身には羨む

鶉舟多 同月十五日

小夜ふくる瀬瀬に鶉舟のかす見えて河邊すすしき篝火のかげ  
かいくだす河瀬や廣きかがり火の影をならべて鶉舟さすなり

草花盛 同月二十五日

いろいろに染むる露をもこきませてさかりに飽かぬ秋の花園

江邊鷺同

あをやぎの蔭に入江の水きよみところを得てや鷺立てるらし

氷始解 八月十四日

今朝のあさけ氷をわたる春風のあとめづらしき池のささなみ

今朝までの氷もながれ行く水に吹くあと見ゆる春のはつかせ

曉 八月二十二日

ともし火は残るほのぼの長き夜に猶待たれける窓のしののめ  
八聲なく鳥より後もながき夜のねざめのまくら秋ぞさびしき

湖上月 同月二十五日

ささなみ（ま）もみがきそへてや影清くうつるかがみの山の端の月

寄簾戀 同

おもかげも小簾の間ちかきそひふしに今は隔てぬ心ともがな

名所山 九月十四日

みそめけむいつの初雪そのままに世世をふりつむこしの白山  
白妙のそらめやかよふ花のあした雪のゆふべのみよし野の山

名所紅葉 同月二十五日

たぐひなき色に染めけむ秋よりや名にも立田の山のみぢ葉

樵路嵐 同

歸るさやかさなる嶺のあらしをも薪にそへてかへしおくるやまびと

紅葉勝花 同月二十八日

これもまたかすみ霧と咲く花の春日わするる秋のみぢ葉  
春の花かげにもいかがもみぢ葉に染むるころの色の千入は

窓 十月十四日

ただひとり書に向へる窓の内の見いれゆかしき主や誰れなる  
三の友あかで語らふ窓のうちに世のことわざを誰れ忘れけむ

連日苗代 同月二十三日

きのふ見ぬ小田にも今日はしめはへて垣根かずそふ苗代の頃  
しめはふるなはしろがきね日にそひて數そふ頃の小山田の原

夕時雨 同月二十五日

行く雲もまだ遠からぬほど見えて窓にしぐるる夕日かげかな

披書恨戀十月二十五日

うらみよと吹きけむ風のたよりにも憂き水ぐきの岡の眞葛葉

網代十一月七日

はしひめも待つ夜を宇治の河風にさこそ網代の床のさむけさ

なみかけぬ網代の床もひとつ色に夕霜しろき宇治のかはづら

氷満池同月二十七日

絶え絶えにつたひし水の岩根まで池のこほりの閉ぢも残さず

昨日まで氷のほかを行くみづも今朝はのこらぬ池のいはがね

千鳥同月二十五日

おのが音を添へずば月もあたら夜の更け行く霜に鳴く千鳥哉

旅宿同

忘れめや旅寐さむけき夜もすがら風もふとりぬあしの丸屋は

夜 衾十二月十四日

重ねても寐られず寒き夜な夜なをいかがしづやのあさで小衾  
さえとほる里の小衾やはらかに寐る夜もなくてあかす頃かな

紅葉處處同月十一日

嶺に染め谷より染めて初もみちまづ霜ふかきところをぞわく

此處彼處染め出だす露や秋の色のいたりいたらぬ木木を見すらむ

歳暮言志同月二十五日

萬代に立ちかへるべきはじめぞとわきて春待つ年のくれかな  
暮れて行く年もことしはをしまれず豊なるべき春を待つとて

寶永六年

元日於柿本影前言志撰本一補

をこたらぬ今日の手向もこの春はよそながらなる大和言の葉

同日於京極黃門影前言志同

ゆくすゑの春は千歳に立ちかへりまたこそかけめ和歌の浦波

春雪似花 正月十三日

春は來ぬこれもまづ咲く花と見てえならぬ雪の枝やかざさむ  
色さむく見しおなじ枝の雪も今むかふころの春のはつはな

立春朝 同月十四日

朝もよひ昨日の去年の烈しさもあらたまる世の春や立つらむ  
年暮れし四方のけしきも名残なく春立つ今朝の空ののどけさ

梅交松芳 同月二十二日

梅かをり松もいろます春のやどこをも神はよそにやは見む  
梅が香を千年のこゑにこきませて松より花のはるかせぞ吹く

田 鹿 三月十四日

おのれまづほに出でて小田の秋の色を稻葉に急ぐ小男鹿の聲  
末とほき田の面をかけて鳴く鹿は稻葉にこもる妻やとふらむ

河早春 同月十八日

山ふかき貴船のおくも春ぞとや雪げをそへてたぎるかはなみ  
落ちたぎつひびきも添ひて貴船河はるには早き雪げをぞ知る

埋 火 同

かきおこし思ひな出でそ何ごとにも心にこそはうづみ火のもと  
風吹けばたたみひろげて寝し床にあたりもかこふ埋火のもと

野雲雀 同月二十五日

雲雀鳴く野邊の若草かげを淺みいづこにおのが床はしむらむ  
不見戀 同

小夜衣 おもふあまりにかへしてもまだ見ぬ人は夢にだに見ず

時時間戀 同月三十日

人はまだよすが定めずとばかりをうち聞く度の身に頼みつつ  
世語はなほざり事の上をいつをりよくて問ひも聞かまし

晚鐘 四月七日

おどろかす入相のこゑはここながら向へば遠き峯のふるでら  
みねこゆる雲にはあともとどまらで入相の鐘にのこる山かせ

晴天鶴 同月十二日

おのがため千里に晴るる日影とや天飛ぶ鶴のうれしげに鳴く  
さしのぼる日影にむれて舞ふ鶴の雲なき空を飽かずとや思ふ

曉雲 同月十四日

夜ふかしと見るがうちなる横雲にしらむひかりも細き山の端  
鳥が鳴くそなたにしらむひかりをもまだ見ぬ山の雲ふかき空

卯花 同月二十五日

月の中にありてふ名とて卯の花はそれかと紛ふ色に咲くらし

關鶏 同

起き出でて關路を越ゆる旅人のあとよりおくる宿のとりがね

欲無名戀 五月七日

誠なき名こそをしけれさりぬべき中とて世にはよし許すとも  
よそにこそはかなく思ひたはれじまかかるや河の浪のぬれ衣

五節 同

いにしへのをとめのすがたおもかげも今は絶えぬる雲の通路  
いつまでか五たび返し舞ふ袖の名ごりものこる雲居なりけむ

五月雨雲 同二十五日

五月雨の雨の八重雲いくへともかぎり知られぬ日敷をぞ經る

連夜待戀 同

來ぬ人を夜な夜な託つ袖の上に待つとも告げぬ月はとひきて

市郭公 六月二日

さわぎたつ市にはをしめ郭公聞きうることもあらしはつ音を  
こころなく市場ぞさわぐ郭公なにかへても待たむゆふべに

遠村秋夕 六月七日

住むやたれ霧立つ秋の山本はおなじながめのゆふべならじを  
さびしさもさぞなはるけき野邊ふもとへだつる里の秋の夕暮

寄神祇祝 同月二十五日

あたらしき神のみづがき千代こめて久にをまもれやどの行末  
まもりあれと神のいがきもあらためて宿にも契る千代の行末

朝 鶯七月十四日

新しき宿のはる知るうぐひすの今朝の初音やおのがことぶき  
霜にまだむすぼほれつつおのが音も寒き朝けの窓のうぐひす

初 春 同月八日

神がきに春のひかりはこもるとや霞まぬさきの山ののどけさ  
朝まだきまだきに春のいろ見えて霞もよほすそらもめづらし

早秋月 同月二十五日

風の音も聞きだにわかぬ秋をまづ目にはさやかに三日月の影

寄木戀 同

杉ならで立てる梢もなをとばば待つしるしとは見えむ軒端を

菊滿庭 八月十四日

栽ゑそへてところせきまで咲く菊に庭は山路を見する秋かな  
ここかしこませゆふ菊はところえて花にぞせばき庭の眞砂地

稻 妻 同月二十五日

おきかはる露を草葉にたづねてやところさだめずかよふ稻妻

眺 望 同

入日さす麓をかけてくまもなく見わたす野邊の末のはるけさ

郭公數聲 同月二十七日

ほととぎす聲の限をここにとは誰が教へてかおちかへり鳴く  
里なれてめづらしげなき朝夕の聲はかぞへぬほととぎすかな

歎冬藏橋 九月十四日

道もなきいはねと見てや山吹のはなのそこなる井手のかは橋  
谷せばみ咲くやまぶきにうづもれて渡せる橋も花のなかみち

秋忍戀 同月二十二日

秋風の軒のしのおによそへても見せばやおなじ下のみだれを  
同じ名もうき秋風のしの薄ほに出づることはよそにのみ見て

殘菊句 同

ながづきの日かすもすゑの秋風につきぬにほひや残るしら菊

隔川戀 同

これもまたまれのわたりに袖ぬれてうき我がなかの天の河波

林 鳥 十月十四日

染めもあへずもろき林の木の葉かと散りゆく枝のあきの色鳥  
川邊より立ち行くつばさほどもなく林に見えてさわぐむら鳥

落 葉 同月二十五日

村鳥の枝をあらそふ羽かせにもたへぬ木の葉のもろく散る頃

海 路 同

海ごしはやまだに見えぬ沖に出でて行くへも波にうかぶ友舟

待人擣衣 同月二十八日

待ちわびてせこが衣をうつたへにかたるばかりの聲ぞ恨むる  
遠つ人かへらむほどもふる里の夜寒にたれかころもうつらむ

寄山戀 十一月十一日

人は世になさけも知らぬいはき山いひうごかさむ心ともなし  
うくつらき數やちりひぢ年月につもりて戀のやまとなりぬる

松上雪 同月十四日

降りつもる雪を數多の枝に見て今朝もてはやす松のむらだち  
春待たで色まさりけり今朝のあさけ雪に砌のまつのみどりは



寒夜千鳥十一月二十五日

月きよみ霜もあらしもふくる夜に聲さへ冴えて鳴く千鳥かな

寄埋木戀同

とても世にうき名取河よしさらばあらはれはてよ瀬瀬の埋木

岡 葛十二月五日

たへてすむ岡邊の秋を葛の葉のなぞ色に出でて恨みそめける  
眞葛葉にあらぬ袖までつゆしもの岡邊の秋を誰れかうらみぬ

關 鶏同月七日

もる人や寐ぬあかつきを鳥が音に驚かされて明くるせきの戸  
おきいでて行けば數そふ鳥が音に夜はまだくらき關のした道

寶永七年

初春風二月十四日

冬枯のやなぎさくらに吹きそめてこのめやいそぐ春のはつ風  
吹きそめて神のそのふにのどけきや千本の花のこのめはる風

春松契齡同月二十五日

飽かず見て齡も千代と春ごとのみどりにふりぬ松をちぎらむ  
契れなほもとのみどりに立ちそひて色ます春の松のことぶき

河早春同月三十日

おく山のかすみを分くる貴船河はやくや水のはるも見すらし  
残りなく解くるこほりに貴船河ももせの波も春や知るらむ

寄河戀三月十四日

たなばたにならばむ中の逢瀬かはなとてかた野の天の河なみ  
涙川ながすうき名もはやき瀬にたゆまずかけよ袖のしがらみ

梅香薰風同月二十四日

とりとめぬ風のしるべに尋ぬとも木のもとゆるせ匂ふ梅が香

とひて見ば花ある梅の立枝ぞとおどろかしてや匂ふはるかぜ

野雲雀三月二十五日

廣き野にしめおく床もあらはにて同じところに立つ雲雀かな

契久戀同

行くすゑをかけしちぎりも年ふれば思ひや出でぬ井手の下帯

卯花盛開四月七日

とはれずば卯の花月夜夜よしとも告げばや庭のさかり過ぐさで

山がつの卯の花垣根誰がために玉もてゆへるさかり見すらむ

松雪同月十八日

十かへりのまつほど遠きこすゑとや花にまがへてつもの白雪

降りつもの雪はかつがつ吹き立てて風の音せぬ今朝の松が枝

寢覺郭公同月二十五日

獨ぬる小夜の寐覺をほととぎす空に知るとやなぐさめて鳴く

湖水眺望同

もろこしの西にありてふ面影もげにかよひてや鴉のみづうみ

逢切戀五月十四日

ねくたれの曉をしむ手まくらにかきやる髪のみだれてぞ思ふ

かさねても一夜はあかぬ袖のうへに思の露の消えかへりぬる

新樹同月二十五日

見し花のなごりもとまる蔭なれやしげらぬほどのわか葉櫻は

をりにあへば紅葉落葉の色ならでまづ心そむわかかへでかな

池菖蒲同

それならぬみどりかきわけ池水の水草にまじる菖蒲をぞひく

寄月戀同

とどまらぬ面影さへぞ立ちむかふ月は見しよの友かがみにて

水樹多佳趣六月四日

つるかめもここにすませて池水のいはほも松も千代の影見む  
仙人にもなふ田鶴もここにきて千代すみぬべき池のまつ影

雨中竹 六月七日

えだよりもあまる緑やこぼるらむ竹の葉つたふ雨のしづくに  
ことしおひの緑すすしく降る雨に風さへかをる窓のわかたけ

夏 海同

わたつみは濡<sup>は</sup>れてもきると夏衣たつやかとりの沖のしらなみ  
ほたる飛ぶあしやの里のよひよひに同じかげ見るあまの漁火

夏 月 同月二十五日

夏知らぬ月のかつらのかげ涼しこの世のほかの風もおちきて

夏 旅同

あつき日をしばし忘れむ木かげだに夏野の旅はいかに苦しき

朝 霞 同月二十九日

曙のそらにまがへて見し色ややがてもそれと今朝かすむらむ  
雪消えし山のみどりもさらにいま春の色とはかすみにぞ見る

河網代 七月二日

網代にはあたりの波も暮れそめて火かげいざよふ宇治の河面  
氷魚なしてよる年波は忘るるやなすいとなみも宇治の網代に

萩風拂露 同月七日

萩の露に待たれて咲かぬ暮やなきおなじまがきの萩の葉風は  
音たててまがきにはらふ露はみな袖にぞおくる萩のうはかせ

遠擣衣 同月八日

野邊ちかき庵よりここにたぐひきてたえだえなれや風の砧は  
身にしめて聞くともしばしころもうつ遠山賤のおのが夜寒を

草花露深 同月二十五日

はらひあへぬ尾花が袖もこのゆふべ風待つ萩の露を知るらむ

來不留戀 七月二十五日

こひ衣きてもかひなく今夜さへかへさばおなじ夢やたのまむ

萩映水 八月七日

花の枝になみこすばかり咲きこぼれかげもいろこき萩の下水  
うつるてふ名をもわすれて見るかげの花にぞあかぬ萩の下水  
などほととぎす 同月八日

年ごとの初音を急ぐ人になどほととぎすぎてなほ待たるらむ  
待つ人になど時鳥をしむらむ鳴かでもやまじおのがはつ音を  
月前雲 同月二十五日

光にも消えゆくほどのうき雲はたなびくそらも飽かぬ月かな

谷樵夫 同

おふ柴のおもきにたへぬ山人やかへるさいそぐ谷のしたみち

早涼知秋 同 八月三日

桐の葉はさそひさそはず秋きぬとまづ知る袖の今朝のはつ風  
夏ごろも昨日は待ちし風ふれて秋しり初むるあさとでのそで

秋 夢 同月七日

さらに見むいそちの秋のまくらかとぬる玉の緒も長き夜の床  
みのうさを忘るる草にやどるとも秋のこてふの夢はたのまじ  
初雁交霧 同月二十五日

世にしのお誰が玉章かかけてこし霧のまよひの雁のひとつら

寄朽木戀 同

花紅葉目とまる色も知らぬ身はこころも朽ちぬ深山がくれに

逢増戀 同月二十六日

おもひさへ今夜かさぬる袖の上はうれし涙やほさでぬらさむ  
あふ瀬にもかはらでいとどあすか川おもひの淵を心にぞせく

竹籬聞鶯 九月七日

うつり来て籬の竹のたかきにもあらぬ小枝にうぐひすぞ鳴く  
花と見て鳴くやうぐひす木にもあらぬ竹の葉しろき雪の籬に

蓬 九月十日

秋は来ぬいつまでかはとからで見しよもぎが柚にむすぶ初霜  
いろかはる誰がもとゆひの面影にしもの蓬はみだれそめけむ

瀧紅葉 同月二十五日

岩にそふ下枝をこえてもみぢ葉の色にぞ染むる瀧のしらいと

深夜燈 同

思ふどちかたる昔はつきもせで圓居に更くるともし火のもと

江上萩 同月二十六日

四の絃の聲をもとほく江にのこす秋のしらべや萩のうらかせ  
ときわかぬ波のいろさへ身にぞしむ入江の萩の秋かせのくれ

紅葉深 同

染めはててすゑつむ色の千しほをも手にまかせたる秋の山姫  
この頃の露の深さもくらべてはおよばぬ色に染むるもみぢ葉

月前紅葉 同

露おつる月のかつらのした紅葉よるも見るべき色や染むらむ  
そらに照る光も枝にかよひてや月にいろこき木木のもみぢ葉

竹雪深 十月十一日

降りうづむ垣根や千ひろ雪の上に残るを見ればいささむら竹  
いかばかり降りそふ雪の底ならむすゑふす竹の下をれのこゑ

瀧 氷 同月十四日

風をいたみ結ぼほれたる瀧の絲のただそのままに凍る岩が根  
おちたぎつづくを中の淀みにて凍りにけらし今朝の岩が根

遠村竹 同月十六日

ゆふけぶり残る色かと竹の葉のつづくみどりに暮るる山もと

世世をへて住む里なれや色かへぬ竹のはやしのおくのひと村

寒 蘆十月二十五日

難波江によせてかへらぬ波の色やひとむら白き霜のかれあし

恨 戀同

人を今はいかうらみむ恨みても心見がたきころづよさに

残 菊十一月十四日

うつろひし色やそらめとたどるまで今朝おきうづむ霜の白菊  
霜にそむいろさへあかず菊はなほ秋なきときの花をのこして

子日松同月二十三日

かげ高く見む春遠き松のうへにまづ袖かけて引く子の日かな  
引きつるる手ごとの松の二葉より契るや同じ千代のゆくすゑ

遠山雪同月二十五日

稀にこそ雪をみやこの山ごしにこの頃しろくむかふ比良の根

鶴歸阜同

聲かはす澤邊の田鶴のともなれや空よりとほく歸るつばさは

寄木待戀十二月五日

とはでもとつれなき色ぞ杉ならぬ木立は著く見えむやどりを  
千とせとも數ふばかりの月日へてこころの松の色ぞかはらぬ

霞同月七日

峯の雪みやこの野邊の緑をもひとつに見せて立つかすみかな  
春の色のみつしほ見せて空の海に立つや霞のなみぞはてなき

冬祝言同月二十五日

いにしへのためしかさなる春にさへ立ち歸るべき年の暮かな  
四方の國ゆたけき年のことぶきも聞えあぐべき春やまぢかき

御製集第八卷終

大正五年五月十日印刷  
大正五年五月十三日發行

御製集第八卷

〔非賣品〕

〔岡田三郎助意匠〕〔佃製本〕

版權所有



編纂者兼 發行所	右代表者	印刷者	印刷所
列聖全集編纂會 東京市麴町區內幸町一丁目三番地	中塚榮次郎 東京市赤坂區青山高樹町十二番地	井上源之丞 東京市本所區番場町四番地	凸版印刷株式會社本所分工場 東京市本所區番場町四番地

發行所 電話新橋一三二七番  
振替東京二九八八番 列聖全集編纂會

終